自分らしい仕事を通して だれもが生きやすい社会に

石本恵美
労働者協同組合 創造集団440Hz 代表理事

いしもと・めぐみ／1980年千葉県生まれ。学校生活になじめず中学2年の3学期から不登校に。その後、フリースクールやオルタナティブ大学での学びや活動を通じて「自分からはじまる生き方」を模索、実践。大学修了後に仲間と「創造集団440Hz」を設立し、映像をはじめとする表現の世界を通して社会的事業を展開する。

不登校やひきこもりの経験のある人たちが構成員となり、映像やデザイン、ウェブサイトの制作を手がける労働者協同組合がある。仲間と密にコミュニケーションをとって、それぞれの個性や能力を生かしながら、自分たちらしい働き方を実現している。2022年労働者協同組合法の施行を受けて、2023年に協同組合の法人格を取得。代表理事の石本さんに、協同組合との出合いや働く魅力を聞いた。

“ミーティング文化”に接して自分らしさを追求

東京・新宿区の住宅地。その一角に、さまざまな非営利・協同の社会的事業の団体が入ったビルがある。地下1階に事務所を構えるのが、労働者協同組合「創造集団440Hz」である。そのユニークな法人名の由来を、代表理事の石本恵美さん（42）に尋ねた。

「生まれたばかりの赤ん坊がお腹の底から泣くときの周波数が440Hzといわれています。産声のような根源的な思いを大事にして、自分らしい仕事をして表現していきたい。そんな思いを込めています」

2010年に株式会社として設立。以来、映像やホームページ、エディトリアル

デザインなどの制作を手がけてきた。なかでも、海外取材によってシリーズ化された映像作品『世界の教育最前線』は、子どもたちの多様な学びの場の重要性を伝え、教育現場のあり方に一石を投じている。

昼食時はメンバーといっしょに食事をとる。コミュニケーションを大切にする

働く４人のメンバーには、共通する過去がある。全員が不登校やひきこもりの経験者であり、石本さんも中学生から学校になじめず通えなくなったと言う。

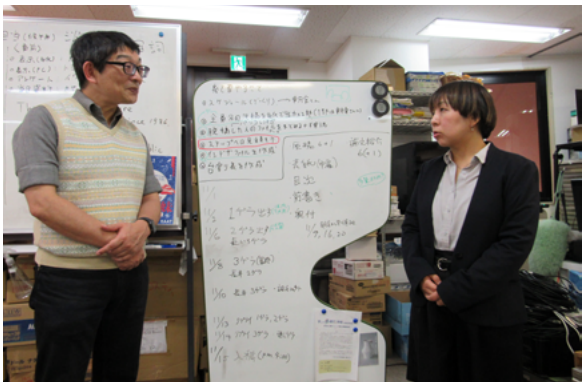
「髪の長さ、靴下の色など細かな校則に違和感がありました。先輩との上下関係や友人関係にも悩み、教室のなかに自分の居場所がなく、つねに孤独感を感じていました。不登校の間は、世の中からはじき出されたような感覚でしたね」

転機になったのは、親に紹介されたフリースクールに通うようになってから。生きづらさやいじめ経験などさまざまな事情を抱えた異年齢の子どもや、サポートする大人と出会い、かれらとの交流のなかで主体的な活動ができるようになった。

「そこでは、一人ひとりの価値観を大事にし、子どもを中心とした学びや活動をしようと、子どもたちが積極的に意見を出し合って決める“ミーティング文化”が根付いていました。その心地よさが、息苦しさや生きづらさから解放してくれました」

その後、だれもが自由に学び表現できるオルタナティブ大学「ＴＤＵ・雫穿（てきせん）大学」（現在）に第一期生として参加。そこで自分がやりたいことを探求し、映像やデザインなどの専門的な学びを得た。自分らしさを取り戻しながら充実した日々を送る。しかし、やがて卒業後の生き方や働き方を自問自答することになる。

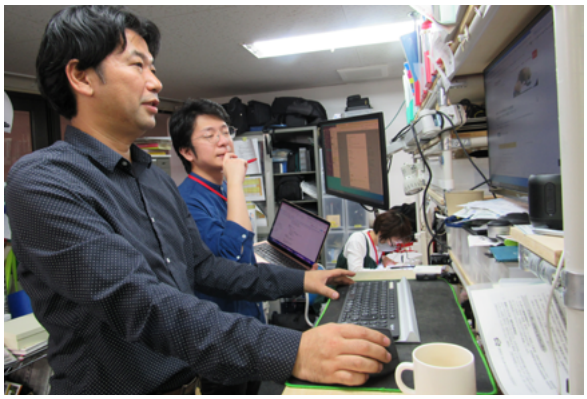
「既存の営利会社では、自分の個性や強みを生かせない、人生の大半を過ごす時間が“我慢時間”になってしまうのではという絶望感がありました。自分たちらしさを発揮するためには、自分たちで働く場を立ち上げるほうがエネルギーを生み出せるのではないか、そうした思いを強くしました」



「ＴＤＵ・雫穿大学」代表の朝倉景樹さんは設立メンバーの一人。自分の関心を仕事にする生き方は石本さんにとってモデルとなった

学んだ知識とスキルを生かし、修了と同時に大学の仲間たちと起業。表現の世界を舞台に、社会に飛びこんでいくことになった。

マイノリティの人たちとつながりたい


長井岳さん（左）も設立時のメンバー。「デモクラティックな働き方でいい仕事ができる」と話す

専門的なスキルが評価され、口コミを中心に年々、クライアントが増え売上も伸びてきた。「とはいえ、経営面でも気を抜くことはできません。クライアントの要望を実現することはもちろん、クライアントと相互理解を大事にしながら、仕事をしていきたい」と、石本さんは話す。

労働者協同組合との出合いは、８年ほど前に連合会のパンフレットの制作などの仕事の依頼を受けたことがきっかけだった。実際に労働者協同組合で働く人たちと接する機会も増えた。

「働く仲間たちと事業・経営を担い、徹底的に話し合って、たがいに支え合って仕事を進めていくという、独特な文化が印象的でした。その働き方は、わたしたちがめざすもの、自分たちの価値観と合致しました」

２０２２年１０月に労働者協同組合法が施行され、翌年６月にワーカーズコープの法人格として一員に加わる。自分らしく働くこと、話し合いを重視すること、たがいを尊重すること、それらを大事にしながら、協同組合としての道を歩み始めた。

さまざまな業務のなかで必要に応じて随時打合せも行うが、全員が集まる毎週２時間のミーティングは欠かさない。さらに半期に一度、映像、デザイン、ウェブ配信ごとに、それぞれの仕事を２日間みっちり振り返る研修も行っている。

「食い違ったまま進むことがないように、話し合いに時間をかけることを心がけています。課題を洗い出して、有効な対策を立てる。うまくいかなかったことに対してだれかを責めるのではなく、なぜそうなったのかということを探り、次の手を打っていくための話し合いです。おたがいの納得を大事にする、そのフラットな組織のよさは、フリースクールや大学での活動で培ったことですから」

日々のミーティングは欠かせない。メンバー間の相互理解をなにより大事にしている

かつて、不登校だった自分自身を「弱い存在」「劣った人間」と捉えてしまったこともあった。しかし、今は違う。仲間といっしょに手ごたえを感じながら仕事ができる。なにより、自分らしい働き方を手に入れた。

メンバーにこうした経験があるからこそ、「創造集団４４０Hz」ならではのミッションがある（下記）。

１．不登校・ひきこもり経験を持つ若者たちの職場の創出
２．自分からはじまる表現活動およびその普及とサポート
３．フリースクールやオルタナティブ教育の普及およびマイノリティが生きやすい社会をつくる

石本さんは３つのミッションに向けてこう話す。
「根底には、だれもが生きやすい社会に変わってほしいという思いがあります。そのために生きづらさを抱える若者だけではなく、性的少数者や在日外国人など、さまざまなマイノリティの人たちとつながりたい。自分たちでできることをしながら、つねに自分たちのありたい姿、持続可能な働き方、生き方はどういうものなのかを追求していきたい。協同組合らしい人と人との関係性を生かして、社会が少しずつ変わっていく力になれたらと考えています」
仕事場のすぐ隣の空間は「ＴＤＵ・雫穿大学」の学び舎となっている。仕事場と若者たちの学びの場の間を隔てる壁はない。玄関の扉はつねに開け放され、若者たちが自由に行き来する。だれもが自分らしい学びと働く場を実現するための拠点となっている。